



やまて図書

キリストの聖体と聖心(みこころ)

三位一体の主日直後の木曜日は、キリストの聖体の祭日です。12～13世紀ごろ、ミサで聖別されたホスティアにキリストの現存が強調されて熱心な聖体への信心や崇敬が行われるようになりました。13世紀初め、ミサで聖別されたホスティアを司祭が高々と掲げ、信者はそれを仰ぎ見るという習慣が始まったそうです。教皇ウルバノ4世(在位1261年～1264年)は、1264年に聖体の祝日を正式に決めました。現在では、木曜日ではなく主日に祝われます。

そして、キリストの聖体の翌週金曜日は、イエスのみ心の祭日です。6月にかかることが多いことから「み心の月」と呼ばれます。イエスのみ心、それは神の愛の象徴です。1675年6月16日、聖マルガリタ・マリア・アラコックの前にイエスが出現して愛に燃える胸を示したことから、彼女はイエスの愛に応えようと思いました。これがみ心信心の始まりで、1856年に教皇ピオ9世によってご聖体の祭日の後の金曜日にみ心を祝うと定められました。

(参考：カトリック中央協議会 HP、女子サンパウロ HP、他)

2023年 横浜天主堂(聖心聖堂) 献堂から161周年 修復を終えた現聖堂は90周年を迎えます

1933年[昭和8]年11月23日に、現聖堂の献堂式が行われました。その当時の祭壇両脇には、跪く天使があり、イエス像は現在のような乳白色ではなく着色されていました。

会衆席と聖所の間には聖体拝領者が横一列に跪いて聖体拝領をするための拝領台が設置されていました。拝領時は白布が掛けられ、司祭は順々に聖体を授けたのです。現在のようになったのは1964年ころで、拝領台が取り払われ、信者が2列に並んで立ったまま拝領するようになりました。

聖体ランプも1964年ころに取り払われました。待降節や受難節には、ここに4本のろうそくが立てられて緑の葉や紫のリボンで飾られ、一週間ごとに点火する古式の典礼が守られていたのです。写真は『聖心聖堂百二十年史』から。



左上左：洗礼盤
左上右：聖体ランプ
左下：拝領台(個人蔵)
右：1933年ころの祭壇

今月の図書

横浜天主堂 150周年記念誌 横浜天主堂・カトリック山手教会 150年史



山手教会は、イエスのみ心にささげられた教会です。2014年に献堂150周年を記念して記念誌が発行されました。

現聖堂は実は4代目で、今年の11月23日には90周年を迎えます。記念誌を紐解き、山手教会の月日に思いを馳せてはいかがでしょうか。

豆すぎる知識

イエスのみ心の図像



イエスのみ心(聖心)は愛の象徴として多くの場合、心臓で表されます。ご絵に見られるイエスはイエス自身が心臓を指差していますが、山手教会のイエス像のように胸にある心臓がよく見えるようにと手を広げているものもあります。どちらにしても、胸の上に剥き出しの心臓が描かれているのです。イエスの愛として描かれた心臓は、ただの心臓ではありません。

- *心臓は、茨に囲まれるか炎に包まれている、あるいは両方。
- *心臓から血が滴る。イエスが脇腹を槍で貫かれたかれたときの傷。
- *十字架を伴う場合がある。

傷と茨は受難、十字架と出血は十字架上での死を、炎は愛だと言われています。(参照：カトリック中央協議会 HP ほか)